

や。

王 この景色に、マリニの河や緑なす、岸邊に陸る、仙鶴の影二つ三つありたきものなり。遙かに遠くヒマラヤの山につらなる丘あつて、麓に幾許の群なすチャマラカ前には木暗く繁る大樹に、木皮の衣々日に曝されて、枝にかゝつて樹蔭には、雌雄の棒鹿横はり、雌は額の美しさをば雄の角もて撫るなど、かゝる景色のあるべきに。

マダ 御意のまに、幕させ給へ。愚案ずるに空しき處々には、やつがれがごと老いさらばひし、仙人共を見するが宜しう御座りませう。

王 この言に意をとめず、嗟乎。忘れたり、吾妹にも尙装ひ

すべきを。

マダ 何との仰せ。

ミス (獨思) 實にも實に、仙居の姫に適ふ装ひを。

王 書工は、この柔けき耳の後に、かざられて、頬のあたりにまつはれる、シリシヤの花を落したり。胸には秋の澄む月影に比ふべき、暎蓮の絲の結びなくては。

マダ 后には、何にか恐ぢてクララヤの花と輝く指の先もて玉の顔かくし給ふよ。や。——なある程。花の香ぬすむ蜜蜂奴、姫が口の蓮より、蜜を吸はうと燥つて御座るな。

王 あつ蜜蜂。執念き、螻追ひのけよ。

マダ 罪あるものを抑へむには、王權無上と存じまする。

王 花匂ふ森の愛し姫に、近寄る雄蜂何しかも、自ら追はる
し苦にや陥る。

マダ 雄蜂に私逸心のあるは、世の人皆の知る所。

王 (絵を眺めて遂に怒りを含みやあ、悪き蜂奴。敢て我妹
の口を汚すか。——風だにふれぬ嫩葉なす、色紅の唇を。
戀の宴に美酒を睨れこそ飲みし唇を。睨が命のまゝ、蓮
の花に封ずべきぞ。やあ、まだか。——)

マダ さる酷刑を、申し渡さるゝ間、何歸順はぬことや御座ら
ふ。

(私かに笑ひながら獨語)我が君は戀と御惱に物狂ひ。

君のお側にあれば吾が身も戀と惱みとこそなけれ、矢張

り、物狂ひじやわいな。

王 しつかと申し聞かするに、まだちやつとも身動きせぬ
か、やう。

マダ やーや。それはそれ、繪の蜂で

王 あつ。心疚しき差出口よな。

吾妹に心あこがれて、恍惚として酔へるまに、無慙や心
すぐなる汝れは、たゞ繪ばかりと告ぐるとは。

(と、悲嘆極つて嗚咽の聲)

ミス (獨語)仲をせかれし戀人の、悲愁こそは斯くのごとけむ。
君や今、四面悲嘆の蜘蛛手に迷ふ。

王 何としてしかく、盡きぬ悲嘆に、耽るやらむ。夜毎の夢の

陸言も、永はに寐る由無くてせかるゝ。涙あふれて分明には見えじ、繪像なりとて姫が面影。

ミス (獨悪) 心から姫すさめたる、苛責免かれぬこの不運。

(侍女再び出づ)

侍女 大君。繪筆繪具の匣を手にして、急ぎ來る道に思はず

も

王 (心いらちてな—何と。

侍女 御后ヅアスマテ、様は、手強く妾を捕へ給ひぬ。

お侍女のピンガリカ、妾が使の故由を、私かに申し告げに
けむ。御後の御言葉に、「親らその匣、大君にこそ持てゆか
め」。

マダ ても、まあどうして逃げては來られた。

侍女 ピンガリカが衣の裾刺ある草の先にかゝつて、逡巡ふ

ひまに逃れ参りぬ。

王 マダ、サイヤ。后に心をかくるあまりに、いよくつゝのる

彼れが高慢。

はや此處に來む。心をつけて、その繪像を秘めて匿せ
や。

マダ (獨悪) 御自身に、お匿しありたきものじやがなあ。

(とは云ひつゝも、繪像を手にして立ち上る)

マダ (聲ふり上げて) 日頃、に臣が籠めらるゝ、君が秘めたる房々
の網よりこの身を逃し給ひて、それに圍らす雲行き通ふ

城樓に、居を賜ひなば、鳩より外には見られぬやう、匿しまつらむその繪像を。

(マダサイヤ繪像をかゝへて入る)

ミス (獨語) 美しくもかねての盟約守るよ。心は餘所にうつせども。

王 (嘆息して) あな悪や。一度得てし幸福は皆奪れけりな徒らに。法にめとりし我妹子を、よし疾しくもすさめたれ、心の底に跡は遺れり。

げに我妹子や、我が家門の光榮となるのみか、豊けき地の木の實さながら、輝く皇子や生れにけむ。

ミス (獨語) 姫やまだ世に棄てられしに非れば、やがては君が

手にや歸らむ。

王 嗟乎。子孫無くて朕れ世を去らば、先祖の靈に、法樂の供へ絶えやせむ。嗟乎。朕が族にあつてまた、ザエダの典例に従ふて、追福ふものや誰れかある。先祖達、世に子孫無くて逝く人の、獻物なる涙の、神酒にぞかへて召すばかりなり。

(と切に嗚咽の聲)

ミス (獨語) 燈火の光かゞやけど、さすがに君が眼を覆ふ影に常闇とは思すなり。

侍女 いたくな嘆かせ給ひそよ。御年齒淺くましませば、數ある后のうちにまた、君に比へむ御子達生れなば、先祖の

祭祀もいや榮えむ。

王 (悲痛極つて) 今日まで榮えて汚點無きブルの血統も睨れにと絶えむ。神河の名には適はぬ所に絶え果つる、セレスウツテ、河さながらに。

(と、あはや絶え入らむばかりなり)

侍女 御心強うちはしませ。

(と、王を介抱する)

ミス (獨語) 君たすけんか。——否々。——やがて生き出ても。いつぞや女神デヴァジヤナニ、姫慰めて、『神々が犠牲を分ちて楽しむがごと、汝れもやがては、汝が夫の愛に幸福を得む』との言の葉もあるなれば、いざや歸らむ。今、君の愛

情と徳とを家苞に、姫が心を勵まして、友のメナカを嬉しませむ。

(と、昇天す)

(暫らくして舞臺の後より聲あり)

聲 婆羅門殺すな、命を救へ。

王 (心をと直してきつとなり) やあ。マダヴィヤが助けを呼ぶの聲ならずや。

侍女 マダヴィヤ殿は繪像を手に、ピンガリカ共に抑へられけむ。

主 行けやチャトリカ。侍女共を威壓すなど、朕が名を楯に后諫めよ。

侍女 仰せのまゝに。

(と、入る)

(時にまた舞臺の後より聲あり)

聲 我れは婆羅門。過ちすな。

王 誰にせよ、婆羅門の身危きこと分明なり。やあ、人々あ
る。

(老侍従ハタと出づ)

侍従 何御用や候ふ。

主 心弱きマダヴィヤが哀れに叫ぶは何の爲。きつとめ
て參れ。

侍従 勅かしてみ束の間は。

(侍従入る。此の間王はきつと身構へず)

(暫くして先きの老侍従、戦慄しながらよろこ
として出づ)

王 異變か。

侍従 異變も異變。

王 何にをのしく。年ふりて厭々するは人の常。恐懼に
老の身震はすは、吹く微風がヒツボラの木の葉揺るにさ
も似たり。

侍従 おゝ。君が御友救はせ給へ。

王 救へとや。何を。

侍従 危難を。

王 事の仔細は。

侍従 諸天に見えて、雲うち蓋へばその名ある、あの高殿の。

王 高殿の何。

侍従 高殿の嶺頭みねのつたての青き鳩だにも、容易くえ行かぬ塔の尖先より、人目に見えぬ悪魔天降つて幼な馴染なじみの君が御友、荒々しくも引奪ひらつひ失せて候。

王 (心いらちて進みながら)やあ。秘めたる房ふさも、鬼神の力に侵されたりや。王權も暴舉には常に力無し。懈怠けんたいの罪より、日毎に時々じじまに起り来る、障礙しょうがいの程も覺らぬ王有り。されば下なる民草が、踏む道知るに由なくて、己が振舞道

に逸れて、いかで民俗正し得む。

(と、いたく述懐の體)

(時にまた前のごとく聲一段高く)

聲 をう。助けよ。

ゆるせ。

王 (耳を遣して足をすゝめ)恐るな、朕が友。何の恐るゝ所あらむや。

(時にまた前のごとく聲悲しげにきこゆ)

聲 恐れはせねど、につくき悪魔、頸筋のびつかむでぐいと一振ぢ、甘蔗てんかんの莖こぎを引きぬく手業てわざに、背骨せこ抜かむず氣色けしきなり。

王 (天をにらむてそれ弓矢)

(吾人、ばたくと王の弓筒ゆづりを捧げて出づ)

會人

勇者の御弓、いざこゝに。

(王、弓矢を手にとる)

(時に舞臺の背後より前とは異なる大音聲)

翠

我れこゝにあり。鮮血に渴して、虎の膾を喰ふごと、悶燥きにもがく汝れ屠らばや。

王

虐げられしを庇はむと、弓矢おつとるド、シヤンタ何處。
(忿怒の念、滿身にあふれて、羅刹朕れを呼びて抗はしむとは。やあ。無道の惡魔。朕れこゝにあり。汝れが命も束の間ぞ。

(弓を高く擧げて)バルヴァタヤナ。高殿の階に導べせい。

侍従

さらば、大君。

(發疾足に入る)

「一幕」

(或は舞臺すぐ廻る)

第三 大高殿

(王、前段の出て立ちにて出づ)

王

(あたり見廻して) 此處、いたく荒れたりな。

(舞臺のうしろより聲あり)

聲

助けよ——救へ。君は見ゆれど、君我れを見じ。猫の爪にかゝれる小鼠そのまゝに、今や我が身は絶體絶命。

王

蠱術に汝が影は見えじとも、仇と汝れとを見分けむ此の矢。心丈夫になう、マダヴィヤ。生血に渴く羅刹奴やい。愛しみに庇ふ彼れを屠るか。一矢は既に弓絃にあり。——死すべき汝れを射ぬかむが爲め。——永しへに、生くべき

婆羅門救はむが爲め。靈鳥純なる乳を啜つて、不純の水を棄つるがごとけむ。

(と、弓絃を滿月に引き絞る。この時遅く、かの時早く)

天神因陀羅が神車の御者マタリ、マダヴィヤを引き

つれて立ちあらはる)

マタリ

天神因陀羅、汝が矢に失すべき、惡鬼羅刹の命を定めた。是れに向つて弓ひかばひけ。汝れが四海の友輩にはそゝげや愛に輝く瞳子。

王

(驚きて弓矢を抛ち) 於御神マタリ。天降らせ給ふも畏こしや。

マダ

エ、人の命を取りそこねたに、迎へてへたばり崇め

るとは。

(と、意外の面影)

マタリ (笑を含むて) やあ。大王。長壽萬歳。宇宙主宰の大神より、遣はされたる天使の故由、篤と聽かれよ。

王 畏こまつて。

マタリ カラネミの子孫、ダナヴァスの族、中々誅に服しがたくて。

王 とはナレドより耳にしたれど。

マタリ 大神、百の犠牲を空しうしても、猛族頓に滅じ難くて、さてこそ御身に御神命、此の仇に向ひ、脩羅の巷に奮闘あれと。七馬に策つ陽靈も夜すがらの闇黒拂ひがたくて、月

靈に道を譲るなり。それ月靈は容易く、闇を散ずる力あり。されば神車に玉座を構へ、弓矢たばさみ、榮えある出陣あらまほし。

主 善靈の主たる大神が、神意は榮に餘れども、今傷はしきマダヴァヤを、荒々しくも苛責みしは何。

マタリ 故あつて、御身悲愁に苦しむと見て、忿怒に紛れてその心、取り直させんとはかりしばかりぞ。材投ぜられて火焔は上り、毒蛇は怒れば敵を突く。光榮獲得せん人は、勇まづ物つて功を遂ぐ。

主 (マダヴァヤに向ひ) デイヴェスベテイルの神命は、かへがたければ、汝は歸つて、王名をもつて、攝政に傳へよかし。『汝れが

賢智に、朕が蒼生の危難を救へ。朕が弓箭には他に天職あり」と。

マダ 勅畏まつて候。とは云へその御弓、先程、何の苦も無しに、引いて賜はる折もあつたに。

マタリ いざ、昇天。

(マダヴィヤの去ると共に王は因陀羅神の大略に玉座を占め昇天す)

「幕」

第七幕

天上界より漸次下界の靈境に移る

(王とマタリと因陀羅神の馬車に同乗して出づ。天上界の景)

王 嗟乎。マタリ。因陀羅神の聖命果し得たりとて、かくまで豊けき榮譽の程は、身に當らじとこそ思へ。

マタリ 何として何として。君雷の大神に、さほどの大徳顯はしながら、敬神の些事とのみ思ふとも、大神に於かせられては神寵限りを盡しても、その大徳に當らじとなす。

主 朕が小功と、その神恩とは比べむ由無し。神寵愚意に超ゆるも遙けし。旅立に臨むて大神は、神座分つて席を賜はり、九天諸神の眼のあたり、朕が身をことさら、いや高に位せしめられ、神側に侍り、同じ榮譽にあこがる、御子ジャヤンタに微笑ませ給ひ、淨樂苑に輝ける、百花の花環を、朕が頸にと投げかけ給ひて、胸には天樹梅檀の、淨香くゆらせ給ひけり。

マタリ 君こそは、善靈主宰の大神より、上無き果報享くべけれ。九天諸靈の神座は再び、ダぬの族の厄どのがれぬ。先には、人面獅子の爪かりて、後には、君が妙手の矢先にて。

王 朕が勝ち軍は始めより、神明加護の致せる所。宛然塵

土臣下の身、丕業を後昆に貽すとも、功は其の主が意に歸する也。

無央數の光を射散らす、日の大神の靈車に先んじ、立たねばいかでアルンとて、夜蔭の闇を拂ひ得む。

マタリ まことや事は等並。

(緩やかに御しながら) 天に大輅を驅ると云ふ上無き榮光見給へや。君が幸福祝ぐ善神は、神女が美しきみ足を染むる料にとて、生命の樹々に立ち交り、紅碧の塗料あつめしが、はや大君が功績を、微妙の樂の詩とせり。

主 (優容として) マタリ。天妖羅刹を平げて、凱陣の途に、幽妙の此處やそも何處。天のいづこに旅せるにや。

マタリ 是れや天河の河原道。——光明赫々一つ環に、周る星
辰生れ出づる道。それや天空翔り行く、諸神を支ふる微
風かぜの道。この道や、昔しヴィシユヌが不法のザアリを、惱ま
し、折の第二步の跡。

王 耳目に動く内心は、微妙の平和に、充ち満てり。
(車の輪を眺めて、今はしも、雲の界や、過るらむ。)

マタリ 何としてさは思ひ給ふ。

王 霽雨を孕む雲の上に、在りとは、車に分明あやかなり。回る
車の輪のあたり、水晶の水玉散らひ、因陀羅神の馬は、光明
に煌めけり。歌に妙へなるチャタク鳥嶺たけの巢より下る
見ゆ。

マタリ 然にこそ、然にこそ。時の間に君知ろしめす國に在る
らむ。

王 (瞰下して影は見えねど、逸早く、天降る天馬に今は、はや
靈たま尅くる人の世も見ゆる。嗟乎、驚かるゝ眺めかな。平地
は山と入り亂れ、樹々は木梢こさかの肩擧ぐれども、小葉こはとばか
りにうち見られ、河はかゞやく絲かそも、流るゝ水は影も
なし。而も刹那に、大地は怪異あやの力もて、もたげられたる
態さまに見ゆ。

(漸々と人界の景浮び来る)

マタリ (天地を拜して、於、楽しい哉、人の居や。君も分明あやかに
見るやらむ。

王 マタリ。楽しき流れ、そゞぐ夕べの雲のごと、東と西との海原に、亘す黄金の帯なして連る山や何の山。

マタリ ヘマクタの名に人ぞ知る、ガンダルヴァスの山ぞ、それ。

天地無上の仙者が詮ある神事の壇場。自然に生りしマリチの御子、人界の王、靈界の父、カシヤバがアディテイと聖なる餘生、天幸うけて楽しむ靈境。

王 (心をこめてをるがみながら) 福祉にとゞく機は尊し。

尊者の御前に心から奉仕ふにゆめ障無しや。

マタリ ゆめさら〜に。實にも勝れし心慮かな。はや大地なり。

主 (怪しみて) 車輪に音無く、微塵も飛ばず。大略の下降に

身は安しとは。

マタリ 因陀羅神と大王との大略に差別のある所。

王 マリチの靈境そもいづら。

マタリ (指さしながら) その森越へてや、彼方畏きヨオギの立てるを見む。――蓬々たる髪を手に抑へ、頂刈りにし

大樹のごとく、身搖ぎもせて陽靈の道見守りつ立ちつくせるを。

ヨオギが體はその半ば、白蟻の巢に掩れて、蛇の皮を帯となし、餘りは腰のあたりに纏ひ、節縛立ちし木々の枝頭を圍むて、兩肩のあたりは小鳥の巢に隠る。

主 殿しき行者崇めまつらむ。

マタリ (手綱を引きしめて) 旅もこれまで。

今ぞ蹈む、宇宙主宰の尊者が靈地。森中に神泉の流れ清らなり。

王 此處靈境の樂しさは、淨樂園にいやまさり、甘露の泉に、沐浴せるにやと恍惚くばかりぞ。

マタリ (車をとめて) 下らせ給へ。

王 (喜んで車を出て) などで汝も車を出づるか。

マタリ 斯かる折には屹度動かじ。共に出づるも仔細無し。

いざ、此方へ。いで此方へ。尊者が靈地、心とどめて眺め給へや。

王 仙者の姿、殿しき靈地、二つながらに驚駭くばかりぞ。

聖き精神に相應はしや。

生命の花咲く森中に

酌ふ太氣を糧として、蓮の花粉に黄金なす、いさゝ小川に沐浴しては神秘の沐浴に徳磨き、清淨無垢の珠玉の小石に飾る洞窟に眞理を冥想ひ、影も微妙の女神達、あたり戯れてめぐるとも、情を抑へて永らふるとは。この森中にありてのみ、眞の行の嶺に上らる。

マタリ

位高きを極めし人は、十全の欲望彌烈し。

(他方に向いて) 於。リドダサカルヤ。マリチの御子は

何いそしめる。何。ダクシヤの姫と物語りとや。姫は

婦徳を身に統べて道義を尊者に詢るとや。さらば待つべし、尊者が閑暇。

(王に向ひ)君が靈地に來り着きしを、因陀羅の父に告げ
くる間、アソカの木蔭に憩はせ給へ。

王 汝が定めに従はむ。

(マタリ入る。王は右手の戦くを覺りて)

王 あゝ。右手よ。なにしかも徒なる前兆に朕れ惑はす
る。昔しの幸福はあとなくて悲愁のみぞ残れるに。

(舞臺の背後より聲あり)

聲 さまでに不安の思すな。汝は何方行く處曲れる性を
見するよな。

王 (罪を澄まして)誠や邪念の處に非じ。

(ふと彼方を見やり驚きながらやゝ。幼者の面わと力

に超ゆるあの少童。三人の比丘尼切りに宥め賺せども、
母の乳房を奪はれけむ、鬢裂けたる獅子の兒を、手遊びに
とて牽き廻すとは。

(と云ふ所へ、一ガよりかゝる様にて一少童、二比丘

尼出づ)

少童 やあ、口開けい。其方の齒數を數へて見む。

甲尼 やれ、性の強い御子じやなあ。妾が子といとしむ生物
を、虐めて何となさるぞや。憤かつて惡戯なさるよな。

仙人達が、セルヴァデマナと名くも道理よく獸を馴ら
し給ふよ。

王 朕が子のごとく、若子に心の靡くとは。

(沈思に耽りながら嗟乎、朕れに子無く、想ひかへすも涙の種。)

乙尼 子獅子逃がさにや母の獅子御身を微塵と碎かうぞや。

少童 (微笑むて) あな恐は。ほんに恐ろし。

王 (鬻博の體、獨懸) 此の少童英傑の勇の萌しあり。枯薪増して、愈々燃ゆる猛火のごとし。

甲尼 お、若子よ。美しい手遊品を參らせう程に、まだ幼な

獸の王を逃がし給へや。

少童 まづそれもてこよ。何處にあるぞや、何處に有る。

(と片手をのばす)

王 (その手を一見して) こはいかに。掌には王者の印あり。

力まかせにのばすを見れば、妙へなる手紋理いと分明に、曉に咲きけむ蓮の花と輝きて、その花瓣の赤き光は、ありとある他の色かくす。

乙尼 言の葉のみでは宥め得じ。なう、スヅリタ。家に歸つて若子サンカラの手遊品を取りて來ませな。彩色千草の瀬戸の孔雀を。

甲尼 いで、持て來む。

(と入る)

少童 それまで獅子と遊ばうぞ。

乙尼 (微笑して) 少童を見かへりやよ。のがし給へ。

王 (獨懸) 木強なる若子愛しや。

(嘆息して) 徳ある父の快樂やいかに。——片言ま

じりのゆかしくも、何かと心もなく笑ふ時、花の清き齒あらはして、遊にふける稚兒抱き、胸に塵をば浴ぶる時。

乙尼 (指をあげて) 何と。妾が言の葉は聴かじとや。誰か仙人おはさずや。

(王を見て) あな、見知らぬ旅の方。願ぎまつらくは、雄々しき此の子に捕はれて、のがれむ術無き獅子の兒を、安らかに放たせ給へ。

王 試みる。

(と、稚兒に近づき微笑みて)

王 おゝ。畏き比丘尼の御子なる若子よ。森の掟を無き

ものにして、徳に楽しむ父君の尊き名譽を何汚す。匂ひも高き梅檀の枝を惱ます黒蛇がごとぞや。

(少童獅子をのがす)

乙尼 あな、嬉し。さはれ、この稚兒、比丘尼の子ならじ。

王 その起居、心の剛氣に適へるは、もとより異生の身ならむも、若子が住處の靈地なるにぞ、かゝる思考も起つたり。

(と、稚子の手を取る)

王 (獨語) 朕が家門とは關係も無き、未頼もしき若芽なる、この稚兒の手に觸るゝだに、いたく楽しみあるものを、父なる人の心やいかに。

乙尼 (王と稚兒とを交るゝに見くらべて) あな怪し。

王 怪しとは。

乙尼 なう、旅の方。君と若子とはよくも似た物。近しい血縁とて無さに。また驚くはその若子、幼心も失せずして君とは知らぬ仲なるに、君が言葉に、素直にも、よく歸順ひしとは。

王 (稚兒を胸に抱きて) 仙者が子にしあらずとあらば、稚兒が家門の名は何と。

乙尼 プルの後胤。

王 (獨語) はあ。若子が氣立も朕が愛しさも、因縁正しくこゝにあり。

(稚兒を下して先づ生れては四海擁護の、聖壁の殿に居

を占めつ、老いては人の欲を抑へて、仙者が嚴しき行ひ澄ます、神樹の根元に家もとむるは、ブルが家門の典例とか。然るに神の振舞ある若子、人身に生れ出てたりとは、怪かしや。

乙 怪しの思も、若子が母神女に血縁ある身にて、カシヤバの森に、若子を生みしと知らば失せなむ。

王 (獨語) 天晴れ、心の憧憬る。是れ新たなる希望の礎の、(聲高に) 若子の母が手握りにしは、いかなる王にや。

乙尼 嗟乎。法の后をすさめたる、王の名指は叶はじよ。

王 (獨語) 嗟乎。朕がことぞ。今こそ問はめ、愛しの稚兒が母の名を。

(沈思して) とは云へ、人妻の、身の上聞くは邪道の振舞。

(先きの比丘尼、玩具を手にして出づ)

甲尼 おい。セルヴァデマナの君。美はしの鳥サクンタラ、
ヴァニヤム見給へかし。

少童 (心をこめてあたり見廻し)サクンタラ。
母様は。

(三比丘尼、共に笑ふ)

甲尼 若子はやさしの母思ひ。——通ふ言葉にさへそれ
と。

乙尼 おい。若子よ。スヅリタは今、此の雄孔雀の形ちと彩
色の美はしきをば譽めたまで。

王 さては、サクンタラとは稚子が母か。さも無くば、美し
き名のある異人か。是れ聴けば、沙漠にあつて徒なる水
の影見る心地せらるゝよ。渴に苦しむ小鹿には空しき
望にはつるは必定。

少童 駢つて飛ばゞ孔雀もよい、助かにや入らぬ。

(と、作物の孔雀を手にとりて見る)

甲尼 (少童の手を見、心亂れてあたり見廻し)あつ。若子の神
符が手に無いは。

王 驚き給ふな。獅子と戯れし間に落ちけむ。探めて若
子が手に着けむ。

甲尼 おい、それ觸るゝは心し給へ。

甲尼 お、眞に拾ひ給ひしよ。

(と、兩人靈博の體)

王 あゝ、見出でたり。輝く寶を手にするを、何とて禁止め給ひしか。

乙尼 大王よ。此の神符には、奇し力あるにこそ。若子生れ出で、聖なる式の果つると共に、マリチの御子が手結びぞかし。もし地に落つるともやあつて、父母ならぬもの手に取れば、身を害はぬものは無し。

王 まだ會ひもせぬ異人の、それを手にせばいかにとや。

甲尼 毒蛇となつて噛みもせむ。

王 然る折節を見たりとや。

兩尼 幾度と無く。

王 (恍惚として) 樂しや嬉し、切なる願望はとゞきけり。

(と少童を緊と抱く)

乙尼 スツリタ。離けられし妻の、苦行にて、久しく惱めるサクンタラに、うれしき消息齎らさむ。

(兩尼入る)

少童 (王に向つて) 母様のお膝に参らう。

(と兩尼の後にゆく)

王 いとしの吾子よ。睽れと行きなば母嬉しまむ。

(と、いふまに兩尼は入る)

少童 ドッシヤンタ王は臆が父。爺はドッシヤンタで無いは。

王

と云はれても嬉しやな。

(と云ふ折しもサクンタラ姫、身には袈裟をつけ、
長髪を一條の打紅にて結び、後背に巻れ隠かせ
て出づ)

姫

(四喜) 吾子が神符の奇しき力に見えしとか。不思議に
も福社や降りけむ。はたミスラセスイが豫言や實に當
りけむ。

(と、一歩々々に王に近づく)

王

(悲喜相半ばする面持にて) 嗟乎。吾妹子。卑賤しき衣
を纏ふとは。いそしむ苦行に面わは憔悴れ、肩に靡くは
一と縋りの頭髪。無情度の無き夫在らぬ間を、微塵もあ

かぬ清き心に守るかな。

姫

(王を見て尙疑ひ) 妾が名夫の君か——悔みと惱みに
青ざめて。夫の君ならずば、誰やらむ。——觸れて吾子
の手汚すとは。

少童

(サクンタラの膝下に走り) 母様。魔を子と云ふ、旅のお
人があると云ふは。——

王

あゝ、吾妹子よ。今日までは、御身無慙にあへしらひし
が無慙に次いで、眞の温情胸に滾々湧き出て、今こそ祈
れ。——ありし昔しの想出と、朕が身の罪の赦免とを。

姫

(兩膝畏るゝな、あゝ、妾の心。
(聲高し) 君が怒の消えしとあらば、妾が身の幸福も上は

無し。

(爾時此の子こそ、妾が夫の子に爲なくてやは。

王 神恩吝かならずして、世にならび無き愛しき影、また眼のあたり顯れぬ。—— 朕が想出は、塵物の間に臙臙となれりとも。儻過ぎてまたロヒニ星、再び月に結ぶごと。

姫 王に光榮——

(と云ひも敢へずして泣く)

王 『あれ、勝軍』との一言は、よしや涙に塞かるとも、凱陣の榮無くてやは。いとしの吾妹に今日また會ひしに。

少童 母様。こりや何方。

姫 吾子よ。二人が運命司る大神にぞ伺ひまつれや。

(と尚泣く)

王 天地に一人の吾妹子よ。朕がつれもなき振舞は、心の奥より拭ふてよ。朕が精神物狂ひの爲め迷ふたり。妄念の闇擴ざれば、聰しき人の行ひも斯くのごとけむ。盲人の頭に花環を飾れば、纏る毒蛇と誤まつて、恐かにも取つて棄てやせむ。

(と、姫の足下にひれ伏す)

姫 おし。—— 立たせ給へ、妾が名夫の君。おし。—— 立たせ給へ。妾が身久しく幸福無かりけれど、尙愛しまるゝ君あれば、今は惱みに代る幸樂。

(時に王、漸く身を起して立ち上る)

姫 いかにして、あはれ幸無の女をば、君が心に想ひ出でけむ。

王 苦惱の槍の痕も無く、睨が心より抜かれなば、ありしと共語りさかせむ。心の悶えやうやくに僅かに止みしのみなれば、先づ拭はなむ、吾妹がかよわき瞳より、溢れて落つる露の珠玉。——涙にあまる怨も失せなむ。

(王は手をのけず)

姫 (王にまかせて涙を拭はせ、ふと王の指を見てこれこそ不運の指環なれ。

王 げにも。是れを見出で、覺えも歸りぬ。

姫 失せにし覺えの湧きしとは、いたくも奇しき力あるら

王 し。
樂しき時節の廻り來て、美はしき樹の花持つがごと、再び御身にかへさばや。

姫 今いまは信まことの籠かごるとしも思ほへず。名夫の君こそつけ給へ。

(マタリ出づ)

マタリ 神寵あつて、君は愛しの妹に遇ひ、子の面わまで見たるよな。

王 汝と共にあつたればこそ、欲望も全く實りけれ。さはれ、大神因陀羅には、この幸運を豫かじめ、知ろし召さるゝことなかりしか。

マタリ (微笑みながら萬事神の知らさぬものやある。先づ來ませ。御神マリチの呼ばせ給へば。

王 我妹子よ。吾子の手とれや。睽れ萬靈の御父に汝等二人を告げまつらむ。

姫 君ありとても御神のみ前に出づるは羞かしうこそ。

王 かゝる幸福ある機なれば、げにさもありなむ。いで、さ
らば。

(皆歩む)

(場景漸次にうつり變つて彼方にカシヤバと

アティティと神座に清談の姿)

カシ (王を指して)ダクシヤの姫よ。汝が子幾千、戦の場に率

て行きし、武夫にして人界の王ドシヤンタは彼れぞ。王が眞弓の力にて、因陀羅神が稻妻も、今は用無く天宮の飾となりて遺るのみ。

アティティ 王者の章は身に具はれり。

マタリ (王に向ひ)十二アティティの御親二尊者、御子見るがごと愛の眼に、君を見守り給ふぞや。はや御前に參られよ。

王 マリチとダクシヤに生まれまし、二柱の尊者にや。太初に自づと生まれまし、梵天王の御孫とや。人は十二の陽靈に榮光の泉を頌め稱ふ。暎が大恩主にましまして、
一百の犠牲供へられ、三界統ぶる大神は、尊者が御子か。

マタリ 然なり。云はても。

(大王とマタリと御前にすむ)

マタリ 御子ヴァサヴァが、聖命果し、大王ドウシヤンタ、聖座の下に跪拜致す。

カシ 御世永はに。

アラ 永しへに武夫たれ。軍に固き戎車諸共。

(姫とその子と共に平伏す)

カシ 女よ。汝が夫は因陀羅子、はジャヤンタにそのまゝなれ。汝れはまたプロマンの女に劣らぬ幸福あれや。

アデイ 吾子よ。契りは永はに諭らざれ。小童は生ひ先き頼もしく、二人が資と幸樂たれ。

尙、近う寄れ。

(皆剛毅者の前に近く坐す)

カシ (昔の者を順々に眺めて) サクンタラは優れし妻の倣ふべき範。小男は天職の念高し。さて大王には三徳あり。

敬神、殷富と武威の徳。

王 於尊者。幾年月の大願叶ふて、神寵にたより、今こそ上れ、人界の榮えの巔に。神恩、永劫渝る時無けむ。先づ花出て、後に實生じ、先づ雲積むて後に雨あり。是れや因果の法の道。尊者が事に御心すさむて、後に遍く幸福を賜はる。

マタ 眞や千古のバラモンが慈悲の徳こそ大なる。

王 あやに畏きマリチの御子。尊者に侍るサクンタラが

ンダルヴァスの式擧げて、睨れと契りを結び交はしつ時を
經て聖人が族に送られて、睨が宮訪ひ來しものをいつか
ゝりけむ盡物にありし覺えはふつゝと消えて情無く我
妹をすさめたり。思ひかへせば尊者が神裔聖なるカン
ナに、嘆くとも及ばぬ罪を犯したり。後に不運の指環を
見出で、ゆくりかに、思ひに浮べり睨が愛と縁。過ぎ來
し方の怪しさよ。耳目の力を全く殺がれて、惑はされけ
り睨が心。眼のあたりゆく象を見ながら、いかなる獸と
怪しんで、印する足跡大なるに始めて象と知る人のごと。
カシヤ 覺らで犯し、冤の罪に、さまで己れを罪なふな。
故とくと聽け。

王 つゝしみて。

カン 女神メナカ、姫を救ふやアディ、テイの宮に伴ひぬ。我れ大
自在天を念じて覺れり、汝が法の妻忘れしは、ドルヴァサス
が呪咀に囚せり、指環を見なば盡も解けむと。

王 (獨語) 睨が名汚辱を雪がれたり。

姫 知らですさめしばかりにて、故無しと聽く樂しさよ。
獨り思慕にくるゝ間に、友や聽きけん、その呪咀。切なる
愛慕に妻が情亂さじとてや秘しけむ、訣別間際に心せら
れぬ。

『夫の君が想出無くば指環さしげよ』と。

カン (姫に) 真相をさとりし上は、夫の振舞にいかりも無けむ。

蟲物に、くらまされては汝れを追ひ、雲散れば、再び赫く仇
儼の愛、鏡の面くもれば物は映らねど、磨けば映る森羅
萬象。

王 まことに朕が身はそのまゝなりけり。

カシ ドウシヤンタ。汝が見抱きしや。その生るゝやウエダ
の典例に従ふて、一切の式我れ行ひぬ。

王 此の兒まことに家門の榮。

カシ 兒が英徳は海より海に、立る大土に王として、人生の灘
過ぎぬ間に、戦ひ敵無く、七洲の世界を統ぶと知れ。幼き
に、猛獸馴らす勇あつて、セルヴァデマナと呼ばれるゝがごと
年のや長けてはバラタの名を得む。——萬宇を化

育すべければ。

王 マリテの御子が生し、若子や、偉大の嶺に上らでやは。
テアテイ まこと、再び福祉ぞめぐるサクンタラ、此の吉慶をカ
ンナに告げよ。母なるメナカは妾が族事の始終は皆知
るべければ。

王 宜ふ所は切に心に願ぐ所。

カシ 神事の方に此の景カンナが心に映らむ。

王 物狂るほしき振舞にカンナが瞋怒はまだ解けざるら
む。

カシ (沈思して) さもあらば、我れより告げん此の吉慶を。
やあ。人やある。

(弟子一人出づ)

弟子 御前に。

カシ 急げやゴラヴァ。顯氣の輕きを横ぎつて、我が名を以て、畏こきカンナに告げてこよ。サクンタラとドウシヤンタの中には美の御子生りぬ。ドウシヤンタが愛の情はドルヴァサスが忿怒に結びし呪咀の解けて、たちまち舊に回りぬと。

弟子 神命のまゝに、然らば直様。

(弟子入る)

カシ 吾子よ。后子もろとも、また因陀羅の大輅に乗つて、樂しく帝座に還られよ。

王 マリチが命のまゝにせむ。

カシ 雨司る宇宙の神は、汝が撫育の蒼生に、膏雨を澤に降らせよかし。汝れ懈怠無く犠牲を獻げて、雷の神と親しかれ。互に善政勸め合ひ、神人二界にくまも無く、仁徳遍滿せられよかし。

王 於。尊者。身をつくしても、いよゝ勵まむ。

カシ その上何の願望やある。

王 神寵是れに過ぐる無し。王たるものは民の爲め、福祉を得る道にいそしめよ。

藝術の女神セレスウッテイは、ヴェダ誦するものに渴仰せられ給へ。

神威は永はに自在なる、青頸朱髪のシヅカ神は罪と罰と
の住處なる儂無きこの世に、他生の苦業を救はせ給へ。

(皆入る)

「幕」

劇梵
さくんたら姫をわり

せ、花薔薇

小森澄々

色香いみじき
ひそかに手折りて
微妙の光は
神秘の影さへ
寄葉小枝の
奇しき光に
みそらに酌へる
すくへば我が胸

花薔薇、
胸にあつれば、
いつしかうすれ、
あゝ、またいつか。
さゆらぎに、
こぼるゝ珠玉を、
星やおち來と、
涙に冷ゆる。

13/3/40



附言

譯者は本曲に附するに梵文學の概觀と梵文學上カリダサの地位及びその後代に及ぼせる影響論に關する一文を以てするの意なりしが本文の出版を急がるに際して唯緒言として一言したるに止めたり

明治四十年一月一日印刷
明治四十年一月九日發行

定價金五拾錢

不許複製

譯者	高橋五郎
譯者	小森彦次
發行者	東京市京橋區中橋廣小路六番地 前川又三郎
印刷者	同京橋區岡崎町三丁目廿五番地 遠藤銓吉
印刷所	同京橋區岡崎町三丁目廿五番地 六合社

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路
電話本局五百七十七番
漢登財金口庫四一〇九番
前川文榮閣

文學博士上田萬年先生。文學博士芳賀矢一先生。文學博士大塚楠緒先生。
文學博士高楠順次郎先生。文學博士藤代禎輔先生。巖谷 季雄 先生
詩 聖。カーリターサ作
梵語戲曲シヤクンタラー

洋裝舶來上等紙金刷版印刷鮮明
全一冊正價金貳圓 郵税金拾錢

本 書 本

て於に學大國帝京東
るらけ上買を冊百壹

詩聖カーリターサの作にして獨のゲーテ、ヘンデル等の人物に
よりて歐洲に吹聴せられたる有名なる脚本なり。
ゲーテは其の自作の詩「サクンタラー」に於て之を天地問美の極
と稱讚せり。獨逸ブルカルト版により梵字を以て印刷し、南條
文學博士、高楠順次郎博士の希望により、特に原價を以て販賣す、
各宗學校及び圖書館等には一本を備ふるの要あり。

◎高橋五郎先生著書 目次

增訂 人生觀

改訂増補十七版
定價金六拾錢
郵税金拾錢

人生觀の當否は直ちに一國民の盛衰興亡に影響す、佛國の
革命も然り、米國の獨立も然り、今日の日本帝國國民最も正
當の人生觀を要す、本書が十六回版を重ねて茲に再び全編
の改作を出せる者は全く我戰後に開ける新生面に處して緊
急なる必需に應じて聊か國運の進歩に貢獻せんとなす爲の
み、此全然たる新著を百忙の中に出せる著者の微衷や必ず
諒せられん

本書は古今幾多の人生觀を掲擧し遂に健全無病なる安心立
命の大人生觀を打出し來れるものなれば人間の人間たる本
分を知らんと欲する者は一讀せざるばある可からず

五訂 正 宇 宙 觀

總クロス金文字入
定價金壹圓五十錢
小包料 金拾五錢

既に人生觀あり宇宙觀、世界觀無くんば有らざる此際應じ
て本書は出づ萬物の靈たる人唯醉生夢死世は何たる我は何
たる生は何死は何花は何が故に紅なる柳は何が故に綠なる
之を知らずして豈禽獸と伍す可けんや本宇宙觀は
世界、宇宙、天地、乾坤開闢、創造、進化、自由、唯物唯心、質有
假有、學術宗教、神質、天文、哲學、科學、人類、動物、有神、無
神、邪佛、道儒、凡神、一神、太極無極、無窮、有限、一元、二元、
有命無命、運命、死生、道德倫理、服生、樂天、豫言、先知、神祕、
催眠、悉く詳論して遺さず眞に偉大なる一綜合(パノラマ)
の如し

ミルトン 原 著 失 樂 園 近 刊

失樂園の大作從來日月と光を争ふ其の脚色の巧妙なる其結
構の雄大なるや宇宙を吞吐して緯々餘あり魔王を掌上弄し
地獄を脚下に蹂躪し天軍魔軍旗鼓堂々隊伍整々空中に激戦
し電鞭閃々電火炎々遂に孰れが勝ち孰れが敗る亦是れ人生
の秘密を金剛の準に描き出せる者高橋氏の此翻譯亦原文一
行譯文一行精細翻譯加ふるに頭注の難句を解くありパラダ
イス、ポストの眞面目始めて茲に見る可し今遠からず譯し
て成らんとす必ず洛陽の紙價を高からしめん

人 生 哲 學

定價金 五拾錢
郵税金 八錢

哲學博士リ君の原著を高橋氏の譯する所の超群絶本書は
倫の人生哲學にして學問と宗教此の書に於て始めて學問の
和階に達せりと云ふべし實に萬人必讀の良書なり

釋 迦 論

菊列洋裝
定價金八拾錢
小包料金十錢

一切の世欲を退けつ一切衆生の爲めに不退轉の誓を起せ
る大恩教主の勇猛心、鉢多羅樹下に明星を仰いで眞理の光
を認たる成道の眞義、華嚴、方等、般若、金剛、涅槃の五
部の教説の義理等著者獨特の精緻の見を以て透徹犀利釋尊
の眞相を批瀝して餘蘊なからしむ

目書賣發及免發閣榮文

日蓮論

定價金六十錢 郵税金十

大日本の法華經と唱へて自ら國の柱石を以て任じ權勢に抗し、迫害に對して勇往直前、妙法華經を説き石を擲たれ瓦を投ぜられても平然として法を説きたる偉僧日蓮の異彩人の眼を驚かす行動は誠に現時の惰眠に陥り萎微爲すなきの宗教界に覺醒を興ふる一大痛棒ならずんばあらず殊にモルモン宗と日蓮宗とを比較評論し布教宣傳の道を論じ所謂豫言者を罵倒す痛快一讀に餘あるべし

戰爭哲學

定價金四十錢 郵税金八

戰爭や小は民人の禍福大は一國の存亡に關す、暗中飛躍程危險なるは無し、幸に世戰爭哲學なる者あり著者即ち國家社會上より宗教道德上より人道、美術上、哲學上、軍事上より推究し、市四古今の哲論を會萃折衷し以て此天下の最大事に千古の大鐵案を下せり、朝野官民の必讀は勿論出て戦ふ者居て守る者共に戰爭の哲理を常に胸裏に藏するを要す立論の新警目を醒すに足る也

世界三聖論

定價金四十錢 郵税金六

著者が双麟の知識と犀利の筆鋒以て縱横に論評せらる壯快の文字深遠の思想三聖の眞面目をして紙上に躍如ならしむ

最新一元哲學

定價金五十錢 郵税金八

著者が該博の知識と深遠の考慮とを以て一元哲學を根底より歴史的に社會的に哲學的に嚴論し附録に『天人論』の一元主義を無遠慮に評論して餘蘊なし 豫言者 宮崎虎之助著

我が新福音

定價金四十錢 郵税金十

古來天師若くは豫言者は國家多難の時に起れり我國近來豫言者を呼ぶ聲層一層多く且つ高きを加ふ豈圖らんや豫言者既に起りて吾人の前に在らんとは俗姓宮崎今道名を『メシヤ』佛陀と號す抱負の深大其名に炳然天下爲に轟然たる宜なる哉此仁自ら我新福音を著し舊來の宗教をして後に墮若たらしむ必や二十世紀以後心靈界の大革命の本源たらん請ふ刮目一讀せよ

正岡 蕨 陽 著

新時代の道德

定價金廿五錢 郵税金四

本書は著者の道德觀を有體に忌憚なく告白せしもの氏の筆力世已に定評あり、然れども此編の如く大膽にして思想の嶄新なるもの氏に於て未曾有なると共に又文壇の珍とすべきものなり

目書賣發及免發閣榮文

ゲーテ原著 高橋五郎譯

フアウスト

定價金七拾錢 小包料金

十九世紀の最大軍人「ナポレオン」「アイマール」に「ゲーテ」を見るや選りて人に告て曰く余今日始めて人を見たりと人は勿論眞個の偉人を謂ふ也、嗚呼英雄は英雄を知る要するに「ゲーテ」は十九世紀第一の偉人と公評せられ而して其傑作「フアウスト」は十九世紀の最大傑作と稱せらる其の天下各國の語に翻譯せられたる夥し今獨英兩國語に精しき高橋五郎先生之を原文原意に照して原文一行邦文一行兩々相對して精密に一字を増減せず最も忠實に翻譯せらる英獨兩文のフアウスト讀者本譯書に由て原意を確知することを得べし近來稀ある大翻譯と謂ふべし高橋先生の譯腕は人生哲學の翻譯以來已に天下の均しく認むる所なれば贅辨を費さず諒曰フアウストを讀む者は譯書を説かずと今より吾人は始めて譯書を説くを得ん歟

ゲーテ原著 高橋五郎註疏

フアウスト

定價金四十五錢 郵税金六

本書は英譯の粹を選び必要なる註疏を附して初學者の便にせらる以て學校の教科書とす可く英學者の獨研究に供せらる可し本書出て、英文フアウスト始て我國に紹介せらる云ふ可し

カーリターサ原著 高橋五郎共譯 小森彦次

劇梵 さくんたら姫

定價金五十錢 郵税金八

歐米の劇本は其の多きをもつて著しく印度の戯曲は其乏しきを以て著し今其の世に乏しく隨つて最も珍しき戯曲中に於て最も名高く遺蹟今に香しきカリダガサが一生の傑作サグンタラ姫をとりて優美麗麗の美文に擲出す眞に破天荒の業にして一讀天女の清歌妙舞を見て心身恍惚の思ひ有らしむ而も譯文に一新機軸を出せるのみならずまた印度の爲め否東洋の爲め氣焔萬丈に眞に近來稀に見る文壇の佳作也

獨逸エツカルト原著 齊木仙醉譯

譽の毒盃

定價金五十錢 郵税金八

本書は獨逸文豪エツカルトの傑作にして村を希服に取りたる大戯曲也登場人物「ソクラテース、プラトーン、ヘレナ」其仙幾多の人物紙上に活躍し人をして新思想の混沌たる時代に處する大見識を得せしむる一大燈明燦たるは喋々を要せず脚色亦快絶妙絶

宮中御歌所寄人 中郵秋香先生著

古今集詳解

和美 全四册

卷壹 古今集序、春賦、上下、金卅六錢郵稅四錢
卷貳 夏秋冬、賀、離別、騷、物名金四十錢郵稅六錢
卷參 戀
卷四 雜
近刊

本書は國文界の泰斗中郵秋香先生が多年の研鑽たなりたる大著にして詞に類はれたる一首の心調の組合、風調語勢に依て生ずる餘情等懇切に説き分け、一首の妙處を示したる古人未發未曾有の解釋一讀忽ち歌の秘訣を悟るべく而も講義筆記体總振かな付にせられたれば國歌國文初學研究者は勿論我國文學の花を味はんとする書は是非一讀すべき也。

中郵秋香先生著

文鑑 千草の錦

定價金六十錢 郵稅金十錢

此書は中郵秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄録せられしが積んで數十卷と成りしを中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、記行、論説、消息、物語體等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ特に上段には要語數篇を載せ作習の模範と應用とに供せられれば他に其の比を見ざる最良の文鑑なり。

菅 綠蔭君閱 渡部竹蔭著

明治の家庭

定價金二十五錢 郵稅金四錢

本書は我國現今の不完全不規則極まれる家庭を矯正せんが爲めに生れたので理想の家庭を作らふと云ふ者は是非一讀せざるべからざる珍書なり。

宮中御歌所寄人 中郵秋香先生新著
華族女學校講師 小野鷲堂先生淨書

新編書簡文例

(用子男) 木版半紙摺 頗高尚優美 男女各一册 定價金六十錢 郵稅金六錢

新女子書簡文例

定價金六十錢 郵稅金六錢

本書の文例は現代の文豪中郵秋香先生の懶漿より進出せしものなれば一言一句律々たる趣味あり繁に流れず簡に失せず擬古に陥らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり加ふるに書は紙硯界の巨擘小野鷲堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の範として上乘の書なり特に上欄に類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるなれば新編書簡文法式と相待つて斯道の完璧と稱すべきものなり。

宮中御歌所寄人 中郵秋香先生新作
華族女學校講師 小野鷲堂先生淨書

新編手紙

(用子男) 木版半紙摺 無類の美木 男女各一册 定價金四十錢 郵稅各四錢

女子文の手ほどき

定價金四十錢 郵稅各四錢

本書は中郵秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲め通俗平易なる實用の文題百餘種を總振かふ付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鷲堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書也。

久津見 藤村 著

家庭教育の子供のしつけ

定價金二十五錢 郵稅金四錢

本書は著者が該博の識と多年の實驗に依り幼稚時代、兒童時代、少年時代、青年時代の四段階に至る家庭教育の仕方を書文一致にて十三章百六拾餘條に説き示されたるものなれば婦女にても容易に理解せられ直に實地に試むることを得べきやう記述せられたる近來稀に見る處の好著なり。

新編書簡文法式

(用子男) 總クローリス 定價金五十錢 郵稅金六錢

新女子書簡文法式

定價金六十錢 郵稅金六錢

女子は男子と自ら差別ありて特に散らし文は小野鷲堂先生の書に係るものを挿入せり。

此法式は元來封建制度の代に於ける尊卑上下に就きて種々の段階を分つが加き煩を避け今日の現狀に依り舊新を對照して以て時の宜に從ひ適當の式を設けられしものなり故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論荷も筆を書簡に把る者は瞬時も座右を放つべからざる要書なり。

早稻田大學講師五十嵐力著

兒童の研究

定價金十錢 小包料金十錢

文學博士 南條文雄師 監
文學博士 前田慧雲師
文學博士 村上專精師 修

親鸞聖人全集

紙數一千頁餘
四六版五號活字
總かたつき美裝

總クロス金字入、上巻、下巻、定價金壹圓
合巻親皮製、定價金壹圓
小包料、定價金貳圓

宗教の本領は信仰にあり信仰は宗教の眞髓にして又永久の生命也、而して如何にして此の眞髓に達し、永久の生命を得らるべきかこれ求道者が内心に懊惱する叫聲にあらずや、吾人は教祖の人格に觸るゝを以て最要適切の方法なりと信ず苟も人格に觸れむとせば其遺著を拜誦するの外なしこれ敬聞が先づ親鸞聖人全集の刊行を企つる所以也。

蓋し日本佛教の精華は鏡りて鎌倉時代にあり而して親鸞聖人此時に出て玉ひて宗教の眞髓たる純他力の法幢を聳へし直に備明なる信仰を宣布し玉ふ爾來幾千萬の生靈をして慰安の道に住せしめ、渴仰の首を低れしむる所以のもの其人格の崇高にして遺法の廣大なるに依らずんばならず、今や年所悠々として遠く七百年を隔つると雖ども其崇高なる人格に接せんと欲せば先づ遺書

- ◎ 教行信証 六卷
 - ◎ 愚禿 二卷
 - ◎ 淨土和讃 一卷
 - ◎ 正像宗和讃 一卷
 - ◎ 尊號眞像銘文 一卷
 - ◎ 未燈 鈔 一卷
 - ◎ 御消息集 一卷
 - ◎ 歎異 鈔 一卷
 - ◎ 改邪 鈔 一卷
 - ◎ 辭山御書等 一卷
 - ◎ 淨土文類聚 鈔 一卷
 - ◎ 入出二門偈 一卷
 - ◎ 高僧和讃 一卷
 - ◎ 三經往生文類 一卷
 - ◎ 唯信鈔文意 一卷
 - ◎ 一念多念證 一卷
 - ◎ 注遺廻向文類 一卷
 - ◎ 口傳 鈔 一卷
 - ◎ 執持 鈔 一卷
 - ◎ 親鸞聖人解題
- を拜誦せざるべからず。本集は此等の遺文を集輯大成し前倭博士、村上博士、前田博士の監修の下に嚴正なる校訂を加へ、其漢文を以て託述せる分は、大抵和譯を用ひて日夕拜誦の便を圖れり。其紙質印刷は特に精選し、製本は壯麗美麗にして堅牢無比携帶に便利にして眞宗聖典として又佛教聖典として其名に背かざらむことを誓ふ。苟も眞宗の流を汲み、聖人の人格に接せむとするものは是非とも座右に備へられむことを望む。

眉山小室重弘著

實驗雄辯學

定價金三十五錢
郵税金六錢

文明社會の暇は言論を武器として輸贏を決せざるべからず不辯舌は竟に社會競争の上に於て劣敗者たるを免かれず本書は著者が多年の實驗に基き談論の秘訣雄辯の妙用を講述せられたる者なれば唯に雄辯術のみならず亦文學にも創見する所少からず故に學生諸君は勿論苟も文明の國民たる者は一本を座右に備へ自己の運命を向上發展せられよ。

綱島梁川著

病間錄

定價金壹圓
小包料金拾錢

世評噴々たる哲人の言に耳を傾け、四版早く賣れて長く世の渴望を癒す能はざりしが今や其機至り讀書界の満足に興へんとす神を傾ひ信仰を欲する人の欠くべからざる寶真なり。

中村春雨著 小林千古著

新約物語

原色版六葉及寫眞版二十四葉挿入
定價金壹圓
小包料金十錢

赤藤齋及
松島藤川
麟武松泰
作二洲次
畫畫畫著

地理讀本

菊版總クロス
定價金六圓
郵税金十錢

科學を面白く書いてむつかしい教科書に服き果てたる現今の教育界に裨益するものが無かつたのは残念であつた。地理讀本は此欠陥を補はんが爲に著者が實驗に鑑みて天文、地質を始め地理學一般の知識を尤も平易の筆を以て談話體に書き綴りたる有益なる家庭の讀物である兒童の校外讀本として又教師の教材として絶好の良書である希くは少年子女教育に熱心なる教育家父兄の一讀せられんことを。

海軍々令部附譯官高須五湖著

日露會話獨習

定價金五圓
郵税金六圓

露語に精通せらるゝ高須五湖先生多年の研究に依り獨力露語を練習應用するの便を開かれたり露語の發音文法より日常必需なる各種の用語を網羅し終に當世會話の粹を萃むるに刻下の好者亦永代の名作と稱すべし。

13/3/40

目書賣發及免發開榮文

海老名正先生編著

耶蘇基督傳

菊版洋裝 額金十
郵税金十

井上博士の譯述。聖書と相俟つて我讀書界多年の渴を充たしたるものは本書なり。現今に於ける基督傳中の白眉也。トルストイ伯著 加藤直士譯

我宗教

菊版洋裝 額金十五
郵税金十

「トルストイ」伯が露國及び歐洲全土の宗教界を顛倒せしめたる宗教論の反譯也。譯文平易也。文學博士 高瀬武次郎先生著

王陽明詳傳

菊版洋裝 額金十五
郵税金十

「王陽明」の事蹟。性白學說を詳密平易に傳したる者は本書也。有爲の士は陽明が成効の歴史を綴り簡易實用の學を味ひよべし。文學博士 井上哲次郎先生著

釋迦牟尼傳

菊版洋裝 額金十
郵税金十

「釋迦」の史傳として尤も完全無缺考證該博なるものは本書なり。益々好評隆盛とし、申込み絶えず。内容推して知るべし也。

海老名正先生著

靈海新潮

四六版 額金八
郵税金八

清澤 滿之 著

懺悔錄

四六版 額金七
郵税金八

木下 尚江 著

懺悔

定價金三十五
郵税金六十五

中村 春雨 著

舊約物語

定價金一圓五十
小包料金十五

浩々 歌客 著

鷗心錄

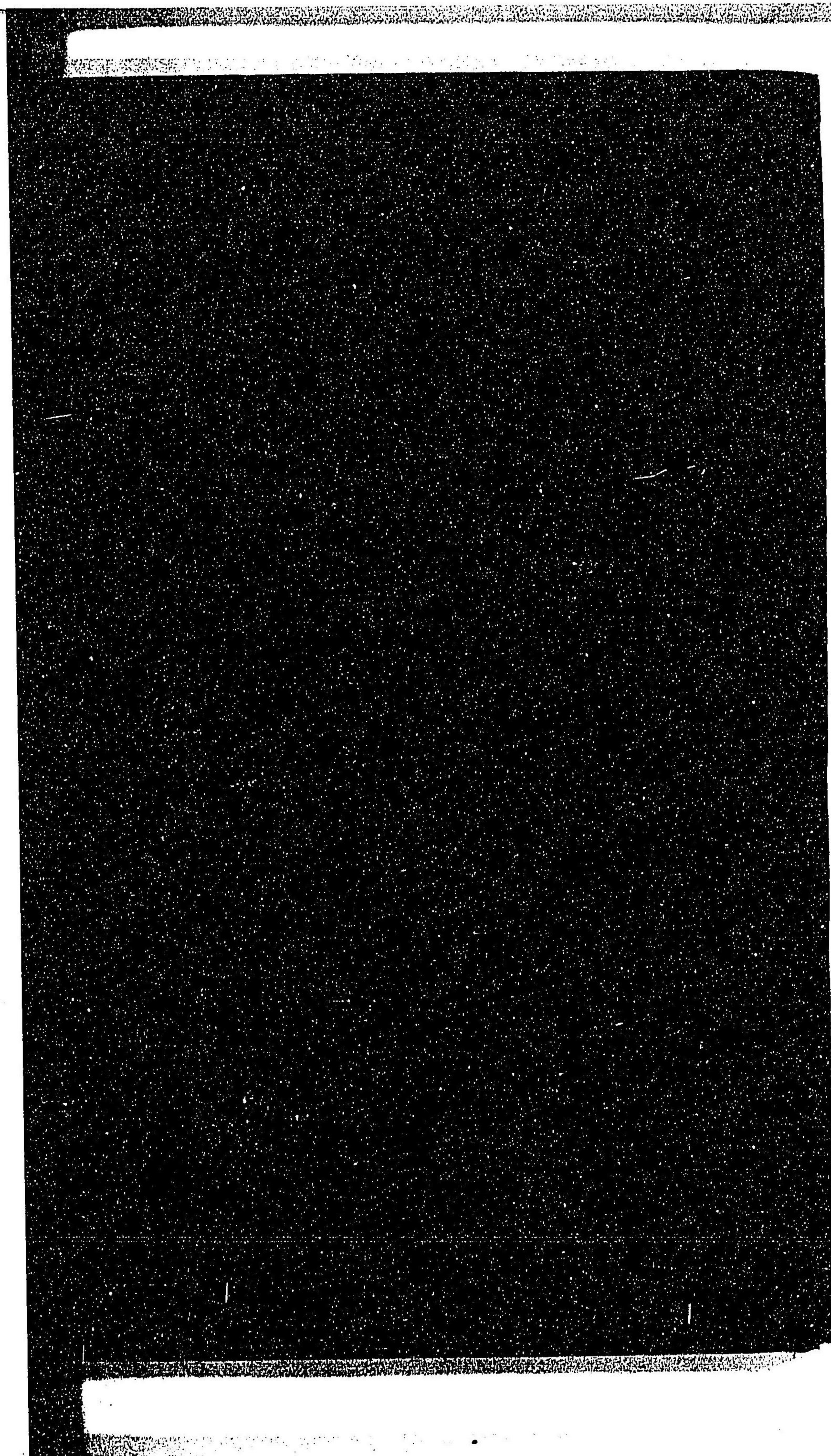
定價金四
郵税金六十

安部 磯雄 著

理想の人

四六版 額金七
郵税金八

32
307





101019-000-5

32-307

さくんたら姫

カーリターサノ著

M40

DBY-0301

